

目的 子どもが自立した食生活となるために、学校においては給食や教科をとおしての食教育がおこなわれている。一方家庭でも親の食に対する意識や実態およびいわゆるしつけをとおして知識や技術を身につけている。子どもたちの食生活のおかしさは、その原因として加工食品など外食産業の振興による食生活の変化が考えられる。が、親自身の生活が変化し、それにともなって家庭での食教育機能が弱まってきていることも要因の1つと考えられる。そこで本報では、親の食に対する意識や実態と子どもの食生活との関連を、食生活の指導や技術の習得の側面から検討し、次の様な結果を得た。

方法 福山市内の小学校5・6年生の児童およびその父兄を対象とし、1985年6月中旬1週間の据置調査を行った。有効回収数は子ども548人(回収率83.1%)、親520人(回収率78.8%)であった。調査は生活基盤、親子の食生活意識、食事形態、食事内容、食生活の指導、食事場面の絵について行った。

結果 1. 食品摂取状況の良い子どもは食事の期待感や満足感が強く、豊かな楽しい奮闘気の食事場面を画いていた。2. 男女とも注意されることは食事マナーが多く、注意数の多いものほど好ましい食生活を送る傾向がみられた。3. 食事の手伝いは女子の方が多く、手伝う内容は盛りつけ、後片付けなどが多く、調理にかかわるものは少なかった。4. 食事の手伝いをよくするものは、意識的な面でも実態的な面でも好ましい食生活を送っていた。また、手伝いをするものほど技術や食品知識の習得もよかった。